

学校は駅。ここから毎年毎年、多くの若い

人が旅立っていく。周りの景色は移り変わっても、いつもそこに校舎があり、学校があつた。学校は泉。次の世代へ伝える文化や伝統がこんこんと湧き出る泉。その泉がなくなるといふことは、その村、その町の文化がなくなるといふこと。今、ふるさとの学校がなくなっている。創立百数十年の歴史を持つ小学校がなくなり、そして中学校がなくなり、やがて高校がなくなっていく。「ふるさと」そこで育ち、そこで文化を受け継ぎ、豊かにあたたかく生きてきた人々。ふるさとの山を、ふるさとの夕日を、ふるさとの文化を、心の糧として生きてきた。

三月二十六日、午後六時、国際交流会館、国府高校フェスティバル。演劇部、軽音楽部、吹奏楽部、その他の発表の場。まだ稚拙かもわからない。けれど私もは伝えたい、国府高校の文化を。私どもは受け継ぎたい、国府高校の伝統を。そして、何よりもこの泉心の学び舎を永遠に残したい。

平成二十一年三月二十六日

全力で生きる

過ぎていく時間はとても早いのです。人生の場面が移り変わっていくにつれて、匂いも風も、どんどん変わっていきます。高校時代には高校時代の匂い、風。強く願い、目標に向って突き進んだ卒業生。今年も「卒業生に聞く会」がありました。全力で生きた卒業生の言葉が在校生の胸に響きます。「目標を決め、継続して努力すること。努力する過程が大切」「先生に頼れ。添削指導を受けよ。逆算して計画を立てよ。時間を甘く見るな」「授業を大切に。クラスメートが支えになる。まわりの人の思いやりを忘れないこと」「野球部の練習からきつい事をしたら後で役に立つことを学んだ。あきらめるのは簡単、やりとげること」「社会のマナーを大切に。身だしなみはきちんと」「嬉しいことに国府高校に来たから今の自分があると全員が言ってくれました。今年の進路は熊大を始め国公立大4名。日大を始め私立大学130名、そのうち熊本学園大65名、国立看護を始め、進学113名、公務員7名、就職151名（三月一日現在）

平成二十一年三月十九日

国府はがき通信

No140

お酒をまきました

お酒を少しずつ、丁寧にまきました。両翼 96 m、中堅 122 m

の立派な国府高校専用球場。今年は創部四年目、いよいよ勝負の年。私どもの野球部は日本一の心を持った生徒を育てたいのです。その柱となるもの、それは礼儀作法と感謝の気持ち、しっかりした挨拶、節度ある上下関係、行き届いたグラウンド整備、磨き込まれたグローブ。このことが自然と日常化すれば野球でも日本一になると信じています。この信念がひとつの形となってあらわれたのが三年生の進路だろうと思います。大分大など進学が26名、マツダなど就職が13名、あの野球部の生徒なら、なんとかしてあげよう。――↓素朴だけれど礼儀や感謝を忘れない。そんな生徒を自然と先生方が応援してくれたのです。昨年創部三年目で熊本県で優勝できたのも、素晴らしいグラウンドを作っていたから。そして名伯楽、永園監督と錚々たるコーチ陣がそろっているから。シーズン開始にあたり感謝の心を込めて、怪我がないようにグラウンドにお酒をまきました。

平成二十一年三月十三日

国府はがき通信

No139

心に残る卒業式

「わが国の各地に石割り桜、石割り松というのがあります。石の窪みに小さな芽を出し、文句も言わず、長い時間かけて石を割り、大地に届き、成長して花を咲かせ緑の葉を繁らせます。卒業生諸君はすでに立派な芽を出し、強い根を張っていることだと思いますが、さらに強い根を張っていただきたい。人生、柔らかな土もある。固い石もある。逆境の時こそ、石割り桜、石割り松を思い出してください。」早坂隆理事長の重々しく心に響く祝詞。校長式辞も旅立つ生徒に贈る愛のメッセージであった。四十九才の時に学問の道に入り、多くの障害を乗り越え、日本地図を完成させた伊能忠敬の生き方から話を進めた式辞。いっただって、どんな時でも自分の限りをやれば、どんな事だって可能なのだと、生徒の胸に刻み込まれたに違いない。会場には楚々とした和服の先生方もいて、華やかで儼かな、心に残る卒業式であった。謝恩会では馬場先生の自作の詩吟なども飛び出し、お母さん方の制服姿まで見られて、これもまた心に残る事であった。

平成二十一年三月六日

国府はがき通信

No138

柔かに心を込めて

日本は教育汚染されている。大学の先生方は何種類も問題作成せねばならず、疲れ切ってしまう。受験は一回、問題ももっとシンプルにして、先生方の作業量を軽減する方が大事。今の親は教育熱心ではなくて、教育結果熱心。(益川敏夫ノーベル物理学賞受賞者)このことは熊本県の高校入試にも当てはまる事ではないでしょうか。公立が前期後期、私立が専願特待、一般入試。中学の先生方も、親も子も、高校の先生方もみんな疲れ切ってしまう。このように教育現場はいつも問題山積ですが、生徒と正対し、生徒の成長を喜ぶ存在であり続けたいと思っています。本日は三年生の最後の登校日。教師を目指す野球部の生徒が大学合格の報告に来てくれました。明日は一般入試。私どもは本校に来る生徒ひとり一人が「人生の中で切り取っておきたいほどのいい時間」を多く持てるよう努力します。生徒の言葉に耳を澄まし、生徒と共に真つ直ぐに柔かに心を込めて進みます。

平成二十一年二月二十七日

国府はがき通信

No137

素敵なもの

「渴ふ」この字なんと読むのでしょうか。本校のある先生から尋ねられた。冬休み京都で九十九才のお父さまと食事をなされた時、大きな額に書かれていた言葉とか。さあ、わからない。九十九才のお父さまは「渴不」カツセスと読んで、潤すという意味ではないかと解釈されたい。冬の京都、古い品格のあるお店、九十九才のお父さまと食事をする先生。想い浮かべるだけで、心が温かになる。私には父と二人で食事をした記憶がない。あんなに蕎麦が好きだったのだから、一度くらい連れて行けば良かったと後悔する。今の生徒も親を思う心は強い。やんちゃな生徒に、「お母さんでも呼んで来るか」と言うと、「先生、親には知らせないで下さい。心配かけたくありません。その代り私をぶん殴って下さい」とダゴ石みたいな頭を突き出してくる。そんな生徒は親孝行する事を約束させて許してやる。いつの世も親と子が共有する時間の確かな感触ほど素敵なものはない。

平成二十一年二月二十日

国府はがき通信

No136

省エネなんかしないで下さい

「省エネなんかしないで下さい。どんな使いなさい。すべてを投入しなさい。不安になる時間があつたら、その時間さえ使い切ることです。入試までの日々をあなたのエネルギーで使い切りなさい。伸びる人は省エネをしない人です。」入試の時期になると、あの手この手で生徒に発破を掛けます。今、中学校の先生方もそのような日々ではないでしょうか。君が苦しみから逃れたいなら、方法はただ一つ、君のすべてを出し尽くすこと。念ずれば花開く。行き詰まりは展開の一步である。あなたが信じ込んでいる限界以上に、あなたにとっていかなる限界もありません。始まりと思うのも自分、終わりだと思つのも自分。

最も長い冬を生きる受験生。最も長く寒い季節。自らが定めたハードルを越えようと努力を重ねる姿は実に尊いと思うのです。その先に国府高校があつてくれたら、こんな嬉しいことはありません。

平成二十一年二月十三日

国府はがき通信

No135

午前三時

午前三時、やっと専願特待入試の資料が出来上がりました。何でも新たな挑戦をする時は苦労を伴うものです。「行ないの最大の報酬は行ないをやり遂げた満足にある」と言われます。お陰さまで、ゴルフ、新体操、吟詠、水泳、ボランテア、部活動・・・実に個性豊かな一芸に秀でた生徒さんが合格しました。入試のレベルも上がりました。平成二十一年度から新学科、新コースでスタートする本校、まだまだやり遂げた段階ではありません。満足する段階ではありません。緒に就いたばかりです。今から一般入試があります。ぜひ、多くの中学生が本校の良さを見つけて受験して欲しいものです。午前三時になろうが徹夜になろうが、私どもはそんな苦労がしたいのです。「君の心の庭に辛抱を植えたまえ、その根は苦いが実は甘い」W・H・オーデン。私どもは甘い果実が欲しいわけではありません。個性豊かな生徒を育てたいのです。大きく実る生徒を育てたいのです。

平成二十一年二月六日

国府はがき通信

No134

図書室

香ばしいような、甘いような、心休まるそんな場所。暖かくて、やわらかな日差しの中で、少年の頃に帰れる場所。そこにいつも笑顔の可愛い先生がいる。湯通堂という珍しい名字、「昔はいとやんことなき人ですか」と聞いたら、口を押さえて笑い転げた。いつも「さあー読んで」と本が語りかける新刊紹介。ここでは、少年も少女も、すっかりした顔になる。

保健室

赤々と燃えるストーブ。しゅんしゅん音をたてるやかん。湯たんぽをだっこしている女の子。怪我をしたニキビ顔の少年が、手当てをしてもらっている。お二人の心優しい保健の先生。ここで出される保健だよりはイラスト満載。「発達途上のあなたに迫る危険」見出しにつられて読んでいくうちに、アルコールの恐ろしさに身震いする。しゅんしゅん、ぽかぽか保健室。

平成二十一年一月三十日

国府はがき通信

No133

肝に銘じて・・・

「私たちは自分の心を磨くために、十年間清掃を続けてきたのです。その結果、表彰されて名誉に思っています。」 唸々と陸上部の主将が話す。熊日緑のリボン賞を戴いても、少しも変わらず、今朝も薄暗いうちから大きなビニール袋を提げて出かけて行く。自分の子供を国府高校に薦められるか。それが出来ないで、中学校に「ぜひ本校に生徒さんを・・・」とは言われない。本校が自信を持っていること、第一は大学進学。学園大に五十二名をはじめ、九大、熊大、大分大、長崎大、筑波大など現役で合格する。第二は部活動。挨拶、服装、勉学等、自己を律して成長していく。第三は就職。伝統と実践が蓄積され、なんと三十年前の受験報告書が残っている。そして実に心強いのは、女子商時代からの先輩が応援してくれる事である。「生徒が悪いのではない。それを指導出来ない教師が悪いのである。」この言葉を肝に銘じて、私どもは新たな挑戦をする。

平成二十一年一月二十三日

国府はがき通信

No132

全身が見えますか

理髪店に行った。「いかがですか」と鏡で頭の上から見せてくれる。愕然とした。「ああ、なんとというハゲ頭か」数少ない髪をなで上げてはいたものの、自分の全身は見えない。人は自分が一番、見えないのではないか。どんなに無理しても、自分の背中を見る事は出来ない。そして、それは本当の自分の能力も見ることが出来ない。「先生、僕は公立を落ちて来ました。馬鹿なんです。」時々、こんな事を言う生徒がいる。「何を言うか。君は君の全身が見えるか。君のすべてが見えるか。私には見える。君は素晴らしい。」本校の進路指導は、まず生徒の良い所を見つける事から始まる。花はその人の心の色に咲く。生徒が自分の色に気が付いたら、しめたものだ。こうして、九大、熊大、大分大など現役で合格していく。もしまだ、自分の色が見つからない中学生がいたら本校に来て欲しい。高校三年間で、自分の色の自分の花を咲かせるに違いない。

平成二十一年一月十六日

国府はがき通信

No131

そこにある幸せ

冷蔵庫を開けます。正月料理の残りとか、色々な物が詰め込まれています。しかし、自分が食べたいと思うものはあまりありません。「何も無いじゃないか」と、ぶつぶつ言っただけで扉を閉めます。今の私達もこのような日々を繰り返しているのではないのでしょうか。目の前に素晴らしいものがあるのに気が付かない。冷蔵庫でも、そこにあるものを活用して、ちょっと工夫すれば、おいしい料理が出来るかもしれない。自分の身の回りを見渡したら、そこに沢山の幸せがあるのかもしれない。

野球部三年、林翔大君（江原中出身）が大分大学経済学部に合格しました。本校の先生方が、早くからその能力に気が付き、本人の努力とあいまって、見事に花を咲かせました。学校というところは素晴らしいものが満ち満ちている所だと思えます。今年も私もはそれを見つけ、育てます。

平成二十一年一月九日

国府はがき通信

No130

嬉しい師走

「オギャ」と赤ちゃんが生まれます。沢山の人が笑顔で覗き込みます。最初の出会いです。こうして、人は出会いの中から人生が始まります。出会いはただの点にしかすぎません。その小さな点が繋がって線になり、その線が面となって、多くの可能性を生み出していきます。今年もまた、本校でその可能性を大きく伸ばした人がいます。熊大工学部情報電気電子工学科に合格した榎木涼太君（益城中卒）です。レベルの高い本校サッカー部のレギュラーで活躍し、推薦で熊大に合格しました。その他の卒業生の中にも出会いの場をさらに広げた人がいます。来春、憧れの大空に飛び立つ坂口絵美さん（平成十七年卒、学園大四年）。六月にはJALに内定。上武大学の福山真魚君（平成十八年卒）も楽しみな一人です。無名だった上武大学を箱根駅伝へと出場させる立役者になりました。本校には共に夢へと向かっていける仲間や先生がいる。その事が具体的な形となって表れる。そんな嬉しい師走となりました。

平成二十年十二月二十六日

国府はがき通信

No129

ぼかばかとした心のぬくもり

冷たい雨が雪になりました。初雪です。今年

一番の寒い日、教職員ハンドボール大会が開かれました。本校もAパートに出場。観衆を楽しませ、相手にあたたかな思いやりを示して、ラスト十秒で逆転負け。勝ちたいという欲望を押さえて、他の人の幸せを願う。このけなげさこそ、本校の先生方の偉大なところであります。応援に来た方々は、その清々しい戦いに惜しめない拍手を送りました。夜は楽しい反省会。多大な御樽を先生方から戴いての宴会です。そこでは本音が出てきます。「年だなあー、五分走つたら青息吐息。」「何も言わない、あるのは年齢差。ただ練習不足。」中には試合の事はそつちのけで、御樽の集りを心配している人もいます。学校という所は高邁な教育論、そして実践も必要です。しかし、こんなほっとする時間も大切なのです。生徒が先生の思いがけないプレーに笑いころげている。ここには厳しい北風は吹きません。ぼかばかした心のぬくもりがあるだけです。

平成二十年十二月十九日

国府はがき通信

No128

強歩会の日

窓が真つ白です。まだ眠りの中にある街を車を走らせませす。学校に着くと、すでに先生方が慌しく働いてます。午前六時五十分、朝礼。十一月二十九日（土）本校創立記念強歩会、もう六十五年の月日を数えます。かつては午前四時出発、阿蘇の立野までの往復。遠い所の生徒は前の日から体育館で宿泊。本校の名物行事として世間に広く知られていました。しかし、時代は移り場所も変わって、今では益城の先までの約二十八km、「楽勝、楽勝」と叫びながら走って帰る生徒もいます。中には、ゆっくりと自然にたわむれながら歩く生徒もいます。午後になって冷たい雨。生徒の体調が気になります。月曜日から期末考査、ひとり一人の生徒にあわせて、それぞれの対応。全員が無事に帰ったのが、午後三時半。そして、全ての後片付け終わったのは、早い晩秋の夜の帳がすっかり下りた時でした。やがて、黄色い落葉が敷き詰められ校門が静かに閉まります。こうして一日が終わりました。

平成二十年十二月十二日

国府はがき通信

No127

自然

すすきの原っぱに風が吹きます。揺れて揺れて白いさざ波のようです。オレンジ色の夕日が車を押ししてくれます。赤紫の雲がたなびいています。ここは俵山。萌の里を通り過ぎて、左に曲がると、Sweet・Memoryという可愛いお店があります。一つ一つ手作りで焼き上げたパンのお店です。添加物は一切、使っていません。本校卒業生、永戸菜緒さん（平成十六年卒）がお母さんと出しているお店です。自然の中の自然のまんまのパン。なつかしくてやさしいパン。本校が大切にしていること。それは命を大切にすること。十一月二十二日から三日間、「健軍農村、地域交流フェスティバル」が開かれました。「国府高校市場」も大賑わいです。山都町の無農薬米など、対面販売に取り組みました。田植から稲刈りまで体験したお米です。実習販売をしながら、食とは、命とはを学びます。そこから人と人との絆が生まれます。

自然はそれを愛するものの心を裏切ることにはけっしてない(ウズ・ナム)

平成二十年十二月五日

国府はがき通信

No126

大切な人

たださえ一人暮らしをしているお兄ちゃん、学校に通えるのは、学費を払ってくれているお兄ちゃんのおかげ、普段は素直に言えないけど、今だからこそ言える「ありがとう」。いつも迷惑ばかりかけてすみません、寮に入ってから今まで自分がどれだけ恵まれた環境で生活していたかを身に染みて感じています。いつも支えてくれてありがとう。なんか私にはかり金がかかるせいか、ごはんがラーメンとかばっかと聞いています。ごめんなさい。その分、国府で頑張るんで。約束守らなかつたりして、いつもいつもごめんなさい、いつも私が悪いのに。

秋の日をいっぱいに浴びて、第一学年の学年通信を読みました。豊富な写真、そして、大切な人に心を込めたメッセージ。こんな言葉を聞いたなら、もう何でも許しちゃう、そんな幸せな気持ちになります。しかし、次の瞬間、廊下を走る生徒に「こら、静かにせんか」と、また怒鳴ってしまう私です。

平成二十年十一月二十八日

国府はがき通信

No125

二十六年前のお母さん

足を洗って、駆け上がった、たくさんの濡れた足跡。みんな土ふまずのアーチがしつかりと出来上がっている。ああ、もうこんなにも強いバネを持っているのだ。こうして多くの生徒がこの学校に足跡を残し、巣立って行った。ある人は部活で記録を残し、ある人は受験報告書に自分の歴史を残した。「嬉しかったです。涙が出ました。お母さんの高校時代の姿が目の前にあらわれて身体が震えました。」二十六年前のお母さんの受験報告書を見て、さわやかに男子生徒が話す。脈々と流れている命のきずな。二十六年前の受験報告書が保管されている進路指導部。それをすぐに取り出すスタッフ。かけがえのない本校の財産、本校の宝。指先で携帯のボタンを押せば何もかも取り出せる現代社会。けれど自分の手で記録を残すことの大切さ。国府進路だよりも、そのことが大きく「てがみ」という見出しで出ている。伝統を重ねたからこそ出来る事がある。感じる事がある。

平成二十年十一月二十一日

国府はがき通信

No124

YES WE CAN

秋の風がたくさんのものを引き連れて、吹いています。落葉、澄みきつた月、黄昏、汗のしみこんだボール。その風を追いかけて、木立の道を左に曲がりますと、そこは本校野球場。長い長いフェンスにそって、ちいさなちいさな青いものが顔を出しています。菜の花の芽です。すつと土を押しつけて、伸びている芽もあります。水仙です。本校第二回卒業生、鬼塚トシ子様からのご寄贈です。厳しい冬の日にじつと耐えて、きつと春の日にあたたかな花を咲かせてくれるでしょう。まだ誰も気づかない芽ですが、確かにしつかりと下に下に根を伸ばしています。早い落日を背に受けて、今、少年達が走ります。ただひたすら走ります。春、この球場に菜の花が咲き、水仙の香が流れる頃、一段とたくましくなった少年達は、激しい戦いに挑戦します。YES WE CAN、オバマ氏の言葉ではないが、私どもも、きつと夢を実現します。

平成二十年十一月十四日

国府はがき通信

No123

高く伸びて白くふんわりした花の穂が私どもを迎えてくれます。「すすき」です。本校にはいつもいたるところに季節の花が飾られています。校内を秋の風が通り過ぎる。何でもないようだけれど、このちよつとした心が教育の場にとても大切なような気がします。人は1+1=2を覚える前に「ゆびきり」を覚えしました。ひとり一人の生徒に人間として生きる約束を確かめながら、この秋空の下を走りたいと思います。人を動かすのは心。その心の量が満ちあふれた秋でありたいのです。十一月一日、高校駅伝。本校は堂々の三位、九州大会出場。陸上部は早朝からの学校周辺の清掃十年。その実践が認められて、「小さな親切」の実行章を戴いたばかり。野球部、サッカー部を始め、多くの生徒、先生が応援に駆けつけました。その声、その心を背に受けて、花の一区では渡辺力将君（松橋中出身 三年）がトップ。さわやかな青空にあたたかな心が満ちあふれた十一月一日でした。

平成二十年十一月七日

国府はがき通信

No122

国府高校は、毎朝、生徒が気持ち良く向かうことの出来る場所だろうか。学ぶことを生き生きと、楽しめる場所だろうか。ほっと安らげる好きなスペースがあるだろうか。生徒はそこから見える風景にどんな明日を描いているのだろうか。高校は人生の中で、最も大切な時間を過ごす場所。その場所が豊かさと潤いに満ちあふれる為に、私どもは生徒のひとりひとりの想いを想う。そして、具体的な形で応えていく。

「若いのだろう、もっとちゃんと歩いて歩けよ、もっと笑顔を見せろよ。」朝からつい怒鳴ってしまう生徒がいる。その生徒が声をかける。「せんせい、おいしいよ。二百円、二百円」満面の笑顔、見事な手さばき、次々と出来上がる焼きそば。十月二十四日、泉心祭、ステージ部門、展示部門、マーケット部門に生徒ひとりひとりの想いが形となって輝いた一日だった。

平成二十年十月三十一日

国府はがき通信

No121

ガマン、ガマン

私も高校は、地域との深い繋がりの中で存在している。だから、良きにつけ、悪しきにつけ、電話が毎日入ってくる。今朝もサツカ一部の善行が報告された。動かなくなった車をみんなで押し上げたとの事。その他、本校生が感謝される事は枚挙にいとまがない。自転車で倒れた方を助けた。大金の入っていた財布を届けた。負傷した小学生を手当てして、家まで送り届けた。一方、叱られる事もしばしばである。「コラ、お前のとこの学校はどんな教育をしているのだ。あの自転車通学は何だ。」それこそ罵詈雑言、言いたい放題、怒鳴りばなし。生徒が悪いから仕方がないけれど、あまりに怒鳴られると言いつつも、訳もしたくなる。だが、一言でも反論したりすると、さあー大変。教育委員会に言うぞ、マスコミに言うぞ、警察に言うぞ。北京オリンピックマラソン優勝者ワンジルではないが、ガマン、ガマン。先生方が登校指導に出て行かれた。朝七時である。

平成二十年十月二十四日

国府はがき通信

No120

品格

七つの社会的大罪、 理念なき政治、 労働なき富、 良心なき快樂、 人格なき学識、 道徳なき商業、 人間性なき科学、 献身なき宗教（マハトマガンジー）今の世の中ほど、この七つの大罪が席卷していることはない。次から次へと露呈する社会的大罪。何を信じれば良いのか、生徒に何を教えれば良いのか、暗澹たる世の中を嘆くばかりだ。そんな時に朗報が飛び込んで来た。ノーベル物理学賞に三人、化学賞に一人、実に四人もの生方が受賞されたのである。暗雲は一気に吹き飛んだ。人間味豊かな科学者である。それぞれが品格があり、高い学識を持っておられる。

私どもの野球部はあと一步で九州大会出場を逃してしまった。創部三年、まだまだの野球部である。しかし、目指すところは高邁。品格ある野球部でありたい。私どもは常に言っている。子供に野球を教えらるる大人になれ。国府高校野球部はそんな練習をする。

平成二十年十月十七日

国府はがき通信

No119

パティシエの道

人は遠くに何かありそうに見える虹の橋を見つめて歩き続けます。足もとは激しくうねるでこぼこ道、赤土の道は荒れているけれど、ずっと続いている希望の道、涙もふるえもしっかり胸に抱いて、踏みしめる道。絶え間なくこぼれ落ちる汗の玉。今、その虹の橋をひたむきに見つめて歩いている人がいます。熊本テルサ料理部門スタッフ、伊織敦子さん、平成十三年、本校卒業、阿蘇司ピラパークホテル、お菓子の香梅、ホテル日航、熊本テルサ。これが彼女の歩んだ道、先はまだ遠いけれど、確かに見えますパティシエの虹の橋。

「一度決めたことはやり通す。それがプロ」「何でも、極めるには、基本がすべて」「何でもいい、人に負けないものを一つ持って欲しい」。頂点を極め、虹の橋を渡った元プリンスホテル総料理長、現熊本テルサ総支配人、土山憲幸さんの真つすくな言葉が、彼女を支えています。

平成二十年十月十日

国府はがき通信

No118

昨日の時計

いいえ昨日はありません。今日を打つのは今日の時計(三好達治)
教師という仕事には昨日はありません。いつも今日の時計が鳴っているのです。
生徒は日々成長し、私もその成長とともに歩むからです。けれど過ぎ去った
昨日がなつかしく蘇る事があります。それは教え子からの便り。進学指導の久保
先生は今、その教師としての至福の時間の中にいます。熊大に今春入学した藤原
みどりさんから手紙が来たのです。「久保先生、お久しぶりです。最近、国府高校
の KOKUFUNews を見て、来年から、学科・コースが変わると知り、びっくり
しています。このことによって、国府高校の生徒一人ひとりが個性を發揮出来る
様な学校になり、進学、また就職できる人が増えればいいなあと思っています。
ちょっとした事なんです。大学への通学中に駅のホームで参考書を読んでいる
国府高校の生徒さんを見て、とても嬉しく思いました。「昨日の時計が聞こえる時、
教師が一番幸せな時なのです。」

平成二十一年十月三日

国府はがき通信

No117